

## 唯仏の寺 浄光寺(浄土真宗本願寺派)

山号を衆宝山、院号を無量光院と号する浄光寺は、本願寺派に属している。

山門は佐竹侯の旧門といわれ、がっちりした薬医門である。その山門脇に「七ヶ寺駐車場」と書かれた駐車場があるが、浄光寺門前に、正徳寺、光泉寺、専光寺、専照寺、常教寺、清心寺の6ヶ寺の寺院がある。すべて本願寺派で浄光寺の塔頭の観がある。

6ヶ寺の境内はさして広くはない。そして、それらの寺の本堂の正面のガラス戸は、それぞれ寺院の紋所があしらわれている。浄光寺のそれは水戸葵であった。19代唯弘のもとに、水戸光圀の養女たにん姫が嫁いできたからであろう。

24輩寺院の中で、このように7ヶ寺が一箇所に固まっている所は他にない。浄光寺と6ヶ寺の光景はとても珍しい。江戸時代、江戸 北国との海上輸送の中継所として栄えた那珂湊を背景として、この寺がいかに栄えたかが想像できよう。

浄光寺は開基以来、この他に寺基があったのではない。

寺の縁起によると、開基は俗名藤原隼人祐頼貞という人で、常陸の国は那珂郡枝川村(現ひたちなか市枝川)に住んでいた。先祖は薩摩の国の人であるそうである。頼貞は稲田にいる聖人を訪ね、他力の教えを聞いて帰依して、唯仏房浄光という法名を賜り、自分の邸を道場として衆宝山無量光院常光寺と名付けた。貞応元年(1222)のことという。

その後、水戸城主の江戸氏が常光寺に帰依深く、また江戸氏を水戸城から放逐した佐竹義宣が、天正19年(1591)枝川にあった常光寺を、水戸城内(現水戸一高の運動場)に移し、さらに慶安元年(1648)、常光の2字を改めて浄光寺となし那珂湊に移し、元禄9年(1696)水戸光圀から現在の地、湊村古館の他1605坪、人夫2万人の寄付を受け寺基を移したという。

殿堂は豪華粋を極め「金光さんらんとして目映く当国第一の巨刹にして、実に関

東別院と称された」ほどであったという。

元治元年(1864)筑波山で挙兵した天狗党は、水戸入城を諸生派に拒否された水戸藩主慶篤の代理の宍戸藩主松平頼徳らと共に、諸生派と戦い那珂湊に向かった。そして8月15日夜半から16日にかけて、諸生派が守る軍隊に攻撃をかけ、彼らを駆逐した。その戦火によって那珂湊の町中は炎上、破壊されてしまった。

その時、水戸藩の別邸寅賓閣(いひんかく)、反射炉、文武館、華蔵院と共に、一朝にして浄光寺の荘厳の殿堂を焼失した。この戦いの前後に、戦火に焼かれた茨城県下の寺は実に多い。

この寺の縁起は、法宝物の縁起が特に詳しい。御真影、御木像の由来、聖徳太子の御縁起、阿弥陀板の由来、鍋冠阿弥陀如来の由来、日の出の名号等々で40を超す法宝物の縁起、由来を書いている。このうち、この寺で最も有名な「鍋冠阿弥陀如来」の由来についてお話をしてみよう。

佐竹義宣は後継ぎがないのを憂えて、枝川の浄光寺の本尊に祈願すると男子が生まれた。義宣は喜んで浄光寺の本堂を枝川村から水戸城内に移し、浄光寺住職唯空に帰依していた。

しかし、家老の中川土佐守、根本越後正は仏法に恨みを抱いて、佐竹家伝来の宝刀鍋切の宝剣を隠し、城内に騒動を起こし、唯空の仕業と訴えた。

唯空は冤罪を被って、文禄元年(1592)8月14日、焼鍋の拷問を受けるが、何の障りもない。やがて城中から早馬が来て、拷問を中止せよとのこと。訳を尋ねると、城内浄光寺境内から煙が出て、それを調べると厨子の中の本尊の頭が焼きただれていたという。それを聞いて中川、根本の両人は阿弥陀如来の不思議を感じて仏法に帰依したという。これより「鍋冠の阿弥陀如来」ということになった。

「鍋かむり日親」は將軍義教に釘の部屋に押し込められたり、火焰の責めにあったり、しまいには焼けた鍋を頭からかぶされた。だが死ななかった。

「鍋冠の阿弥陀如来」の話は真実と信じてよかろう。

本願寺3世覚如とその長子の存覚の対立によって、4世は覚如の次男従覚の子の善如がなったが、この善如がまだ光養丸とっていた貞和2年(1346)2月、14歳の時から3年間、浄光寺の住職をしていたという。そんな訳でか、この寺には善如の御影がある。

浄光寺にお参りした後、鈴木孫一郎重次の墓に行く。孫一郎は石山合戦で信長と互角に戦った紀州雑賀村の鈴木孫市の子である。信長と戦い秀吉と戦い、家康と戦った孫市が命を奪われないところをみると、よほど切れ者であったのであろう。やがて水戸藩の藩祖頼房に、孫一郎と共に仕えたと言われている。(新妻久郎)